

杉並区次世代育成基金活用事業

杉並区中学生小笠原自然体験交流

【令和7年度 派遣生徒報告書】



派遣期間：令和8年3月18日(水)～23日(月)



杉並区教育委員会

挨拶

杉並区教育委員会教育長 渋谷 正宏

このたび、令和7年度「杉並区中学生小笠原自然体験交流」事業は無事に第14期を迎え、区内在住の中学生22名を自然豊かな小笠原へ派遣することができましたことを大変喜ばしく思います。

本事業は、「杉並区次世代育成基金」のご支援のもと、世界自然遺産である小笠原の貴重な自然や文化に触れることを通じて、子どもたちの豊かな人間性を育むとともに、持続可能な社会について考える環境リーダーの育成を目的としています。

派遣された生徒たちは、事前学習会において小笠原の魅力や多様性について理解を深め、自ら課題を設定し、グループでの対話を通して解決策を具体的に検討しました。その過程で互いの学びを高め合い、現地での活動においても説明等を真摯に聞き、積極的に質問する姿が多く見られました。

東京都に属しながらも、24時間に及ぶ船旅を経てたどり着く小笠原では、杉並区内では得ることのできないかけがえのない体験を積むことができました。小笠原諸島に生息する生き物、美しい海や森、独自の気候などを実際に見て、知り、感じることで、子どもたちは自然の偉大さとその保全の重要性を実感したことと思います。さらに、シュノーケリングやホエールウォッチング、ネイチャーガイド、南洋踊りの体験、ビーチクリーン講習などを通して、小笠原の人々が自然を守り育んできた取組や思いに触れ、理解を深めるとともに、その学びは心に深く刻まれたことでしょう。

現地での貴重な経験を終えた後、生徒たちは事後学習会において、一人ひとりが研究成果や思いをまとめた報告書を作成しました。特に、環境保全について自らが果たすべき役割を「環境リーダー宣言」として明確にし、具体的な行動へとつなげていくことの大切さを実感したことと思います。

本事業を通じて、未来を担う子どもたち一人ひとりが、さまざまな環境問題を自分ごととして捉え、広い視野をもって自然について考えながら、多様な人々と協働し、豊かな人生を切り拓くとともに、持続可能な社会の創り手として成長していくことを心より期待しております。

結びに、本事業の実施に当たりご理解とご協力を賜りました小笠原村をはじめ、関係者の皆様、そして「杉並区次世代育成基金」を通じて温かいご支援をお寄せいただきました寄付者の皆様に、心より感謝申し上げます。皆様のご支援とご協力なくして、本事業の成功は成し得ませんでした。改めて深く御礼申し上げます。

目 次

杉並区教育委員会教育長 挨拶	1
目 次	2
思い出写真館	3
I 杉並区中学生小笠原自然体験交流事業の概要	18
II 派遣団(中学生)の報告	
小笠原の海洋ゴミの種類と問題について	杉並区立杉森中学校 第1学年 住 岡 千 真…20
小笠原がよりよくなるために	杉並区立杉森中学校 第1学年 小 山 莞 蔵…21
小笠原の美しい自然を残していくために	杉並区立阿佐ヶ谷中学校 第2学年 毛 利 咲 茉…22
小笠原諸島にしかない生物の進化	杉並区立東田中学校 第1学年 長谷川 幸 毅…23
ウミガメの生活と保護活動	杉並区立松溪中学校 第2学年 岩 橋 凜 佳…24
世界自然遺産小笠原を守るために	杉並区立天沼中学校 第2学年 川 田 蒼 斗…25
アホウドリの絶滅と保護	杉並区立中瀬中学校 第2学年 杉 本 え み…26
小笠原を守っていくには	杉並区立井荻中学校 第3学年 梶 本 萌 衣…27
私たちがすべきこと	杉並区立神明中学校 第1学年 櫛 原 大 和…28
小笠原の生き物を守るために	杉並区立宮前中学校 第2学年 川 口 絢 子…29
小笠原のサンゴ礁が受けている影響と自然環境に与えている影響	杉並区立宮前中学校 第1学年 渡 部 馨…30
小笠原独自の生態系とそれを守るための保全方法	杉並区立高井戸中学校 第1学年 柘 山 仁 美…31
小笠原のクジラの生態系と保全活動について	杉並区立向陽中学校 第1学年 吉 永 花 乃…32
アカガシラカラスバトの保全と今後のあり方について	杉並区立松ノ木中学校 第1学年 洞 澤 志 功…33
小笠原の海鳥の保全	杉並区立大宮中学校 第1学年 渡 邊 恭 右…34
外来種対策と生態系保全の取組	杉並区立和田中学校 第2学年 久保田 凌 介…35
小笠原の固有種を守るために必要なこと	杉並区立西宮中学校 第1学年 伊 藤 茉 里…36
人々の知恵で海や固有種を守る仕組み	杉並区立西宮中学校 第2学年 高 林 和 志…37
小笠原はどのようにして様々な場所で課題となっているごみ問題を改善しているのか	杉並区立高円寺学園中学部 第2学年 飯 岡 龍 斗…38
ゴミが生物に及ぼす影響	杉並区立高円寺学園中学部 第1学年 山 森 悠 里…39
小笠原の固有植物について	武蔵高等学校中学校 第3学年 藤 原 拓 人…40
退化という進化	筑波大学附属中学校 第3学年 高 橋 りっか…41

思い出写真館

MEMORIES OF OGASAWARA

結団式

12月2日火



事前学習会

第1回 1月14日水

第2回 2月10日火

第3回 3月11日水

自己紹介の様子



環境リーダーに関する学び



- 自己紹介
- 小笠原村観光局の講義
- 個人研究・グループ学習 等

小笠原村観光局の講義



グループ学習



1日目

3月18日水

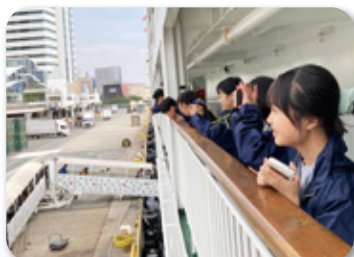
出発・おがさわら丸乗船

- 9:15 竹芝客船ターミナル
第2待合所集合／乗船手続き
- 9:30 出発式
- 10:00 おがさわら丸乗船
- 11:00 竹芝港出港
- 12:00 昼食
- 18:00 夕食・シャワー
- 22:00 消灯

出発式



おがさわら丸乗船



船内インタビュー



日の入り見学



2日目

3月19日(木)

歓迎セレモニー、 シュノーケルレッスン、避難訓練

- 5:30 日の出見学(希望者のみ)
- 6:30 起床
- 7:00 朝食
- 11:00 小笠原着・歓迎セレモニー
- 11:50 入宿式・昼食
- 13:30 シュノーケルレッスン(宮之浜)
- 18:00 夕食
- 19:00 避難訓練
- 20:30 入浴
- 22:00 消灯



歓迎セレモニー



入宿式



シュノーケルレッスン（宮之浜）



3日目

3月20日(金)

海の自然体験活動
南洋踊り体験

6:30 起床
7:00 朝食
8:30 海の自然体験活動
ホエールウォッチング
兄島海域公園
(シュノーケル体験)
昼食
南島
18:00 夕食
19:00 南洋踊り体験
20:30 入浴
22:00 消灯



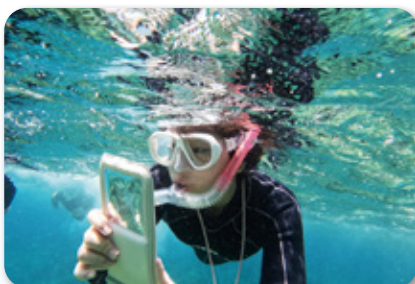
ハートロック



ホエールウォッチング



兄島海域公園





南 島



南洋踊り体験



4日目

3月21日±

自然と歴史の見学

- 6:30 起床
 7:00 朝食
 8:30 小笠原の自然と歴史見学(班別行動)
 長崎展望台、小笠原海洋センター、
 ウェザーステーション・三日月山、
 東平アカガシラカラスバトサンクチュ
 アリ、洲崎、境浦、小港海岸など
 (昼食含む)
 ↓
 15:30 ビーチクリーン講習(扇浦海岸)
 18:00 夕食
 20:30 入浴
 22:00 消灯

長崎展望台



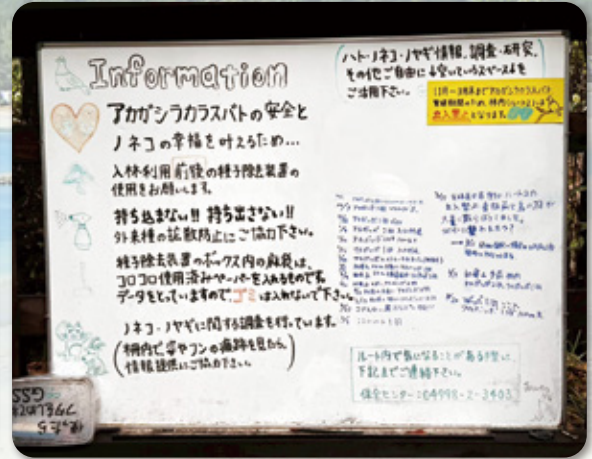
小笠原海洋センター



ウェザーステーション・三日月山



東平アカガシラカラスバトサンクチュアリ



洲崎



境浦



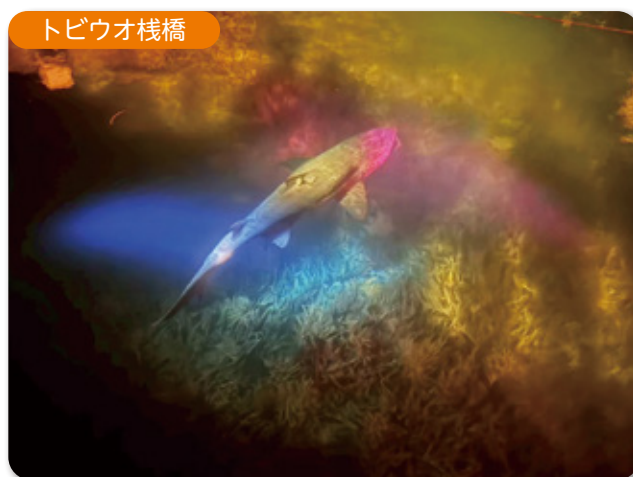
小港海岸



ビーチクリーン講習



トビウオ栈橋



5日目

3月22日(日)

施設見学、
見送りセレモニー、乗船

- 6:30 起床
- 7:00 朝食
- 8:30 退宿式
- 9:00 施設見学
(世界自然遺産センター等)
- 10:00 散策(昼食含む)
- 14:00 見送りセレモニー
- 14:30 乗船
- 15:00 二見港出港
- 18:00 夕食・シャワー
- 22:00 消灯

退宿式



世界自然遺産センター



ビクターセンター



散策



お祭り広場



見送りセレモニー



6日目

3月23日(月)

解散式

6:30 起床
7:00 朝食
9:00 学習班ミーティング
12:00 昼食
15:00 竹芝港着
15:15 解散式
15:30 解散

学習班ミーティング



解散式



事後学習会

第1回 **4月15日水**

第2回 **5月27日水**

第3回 **6月10日水**

- 体験交流の振り返り
- 成果報告書の作成
- 成果報告会の準備 等



成果報告会

7月18日土

- 学習成果発表
- 南洋踊り体験 等



I 杉並区中学生小笠原自然体験交流事業の概要

1 目 的

- (1) 世界自然遺産である小笠原の貴重な自然の中での体験学習や現地の方々との様々な交流を通して、子どもたちの豊かな人間性を育む。
- (2) 各学校・地域における環境保全活動の推進役となる世界的視野で持続可能な社会を考えることができる生徒を育成する。

2 派遣期間及び派遣先

- (1) 派遣期間
令和8年3月18日(水)～3月23日(月)【5泊6日(内船中泊2日)】
- (2) 派遣先
東京都小笠原村

3 派遣団一覧

【派遣生徒】 学年及び学校は派遣時点

No.	氏 名	学年	学 校	No.	氏 名	学年	学 校
1	住 岡 千 真	1	杉並区立杉森中学校	12	柘 山 仁 美	1	杉並区立高井戸中学校
2	小 山 莞 蔵	1	杉並区立杉森中学校	13	吉 永 花 乃	1	杉並区立向陽中学校
3	毛 利 咲 茉	2	杉並区立阿佐ヶ谷中学校	14	洞 澤 志 功	1	杉並区立松ノ木中学校
4	長谷川 幸 毅	1	杉並区立東田中学校	15	渡 邊 恭 右	1	杉並区立大宮中学校
5	岩 橋 凜 佳	2	杉並区立松溪中学校	16	久保田 凌 介	2	杉並区立和田中学校
6	川 田 蒼 斗	2	杉並区立天沼中学校	17	伊 藤 茉 里	1	杉並区立西宮中学校
7	杉 本 え み	2	杉並区立中瀬中学校	18	高 林 和 志	2	杉並区立西宮中学校
8	梶 本 萌 衣	3	杉並区立井荻中学校	19	飯 岡 龍 斗	2	杉並区立高円寺学園中学部
9	櫛 原 大 和	1	杉並区立神明中学校	20	山 森 悠 里	1	杉並区立高円寺学園中学部
10	川 口 絢 子	2	杉並区立宮前中学校	21	藤 原 拓 人	3	武蔵高等学校中学校
11	渡 部 馨	1	杉並区立宮前中学校	22	高 橋 りっか	3	筑波大学附属中学校

【引率者等】 所属及び職は派遣時点

氏 名	所 属・職	氏 名	所 属・職
對 馬 初 音	杉並区教育委員会 教育委員	森 智 之	杉並区立済美教育センター 教育指導係
清 水 里 恵	杉並区立済美教育センター 統括指導主事	本 間 洋 平	杉並区立済美教育センター 教育指導係
白 井 誠 之	杉並区立済美教育センター 指導主事	民間派遣看護師 1 名	
梅 林 伸 幸	杉並区立済美教育センター 指導主事		

Ⅱ 派遣団（中学生）の報告

小笠原の海洋ゴミの種類と問題について

■杉並区立杉森中学校 第1学年 住岡千真

1 「小笠原に流れ着くゴミの種類と量」

(1) 個人テーマ設定の理由

小笠原の本などを読み、小笠原には海洋ゴミが集まりやすいと知った。どんな海流に乗ってゴミが流れてきたのか、ゴミはどれぐらいの量があるのか、どんな種類の材質のゴミが流れてきているのかを調べたい。また、小笠原諸島の住人がどうやって、家庭から出るゴミを処理しているのか、流れ着いた海洋ゴミを、どのように処理しているのかも気になるため調べたい。

(2) 事前学習で学んだこと

小笠原は昔から捕鯨の中継地点で、欧米の人や東南アジアの人が来ていた。太平洋の北半球側には時計回りに大きく一周する海流があり、その海流が利用されている。現在ではゴミが海流に乗って小笠原に来ている。小笠原カントリーコードのことも学んだ。環境省が定めた「小笠原を訪れるみんなのルール」で、自然と共存するための10カ条である。第2条は「ゴミは絶対に捨てずに、すべて持ち帰る」としており、廃棄車両は小笠原の外に持って行き、処分しているそうだ。

(3) 現地での体験を通して学んだこと

① 小笠原のゴミの種類と量

海洋ゴミには海底ゴミと漂流ゴミと漂着ゴミの3種類がある。海底ゴミと漂流ゴミで海洋ゴミの9割を占めており、漂着ゴミは1割だ。小笠原の漂着ゴミの種類は、プラスチックが細くなっているものや漁具などが特に多い。外国語が書いてあるゴミも多いが、日本語が書いてあるゴミも落ちていた。文字が分からないほど小さなゴミが多かった。プラスチックは細かく砕け、マイクロプラスチックやナノプラスチックになって砂に混じっている。ナノプラスチックは目に見えないぐらい小さく、たくさん砂に混じっている。海洋プラスチックの問題は深刻だと感じた。漂着ゴミを収集すると、多いときはトン袋12個分になる。



トン袋(1m×1m×1mの袋)

② ゴミの処理方法

小笠原では、ゴミは焼却処分していない。漂着ゴミは、トン袋に入れて共勝丸やおがさわら丸を使って運ばれ、本土で処理される。漂着ゴミを1トン処理するのに4~5万円かかる。なぜこんなに高いかというと、海水がついていて機械が傷むからだ。現地の人は漂流ゴミを見つけたら、拾って道の端などに集めていた。ルールがなくても、自然に集めているのは印象的であった。家庭ゴミは燃えるゴミだけ回収され、本土に運ばれる。また、農園で生ゴミを回収し、家畜のえさや畑の肥料にするという取組もある。

2 環境リーダー宣言 「身近にできる解決策を考え、自分で行動する」

プラスチックが細くなり、マイクロプラスチックやナノプラスチックになって、拾いきれないぐらい落ちていた。海の中には浜に落ちているより、たくさんのプラスチックが落ちていると思われる。それだけ、魚の体の中にもたくさん入っているのだと考え、とても深刻な問題だと感じた。その問題を少しでも改善するために、ペットボトルではなく、水筒を使うなどの身近にできる解決策を考えて自分で行動する。自分にできることをすることで周りの人にその姿を見せ、環境問題について伝え続けたい。

3 参考文献、資料

・「クジラのおなかからプラスチック」 保坂直紀 旬報社

小笠原がよりよくなるために

■杉並区立杉森中学校 第1学年 小 山 莞 蔵

1 「小笠原の海のきれいさと自然について」

(1) 個人テーマ設定の理由

世界自然遺産である小笠原諸島のきれいな海について気になりました。杉並では生活に海との関わりがなく、本やインターネットで調べると小笠原の海は非常に評価されていたと多くの資料に記載されていたため興味をもち、なぜあんなにきれいなのか、そして、そのきれいな海を守るために私たちにできることは何かを知りたいと思いました。そして、海の生き物ウミガメ、イルカ、クジラなどについても実際にこの目で見て、生態を確かめたいです。

(2) 事前学習で学んだこと

事前学習で海だけでなく、小笠原の町、食べ物、文化、歴史についてよく分かりました。小笠原村の観光局の方は、初めて小笠原に行く私たちのことを羨ましいと言っていました。そのことが最初は疑問でしたが、この事前学習を通して理解が深まりました。それだけ小笠原の自然や文化が貴重なものなのです。この事前学習の学びを生かし、小笠原で楽しく学ぼうと改めて思いました。

(3) 現地での体験を通して学んだこと

私が小笠原で学んだことは、ゴミ問題が生き物に大きな影響を与えているということです。小笠原では、実際にウミガメを見ることができました。自然の中で生きているウミガメの姿はとても印象的で、このような環境を守ることが大切だと感じました。しかし、そのあとに海岸でゴミ拾いをしてみると、多くのプラスチックゴミや漂着ゴミが落ちていることに気づきました。これらのゴミは、ウミガメなどの生き物に悪い影響を与えます。例えば、ウミガメがビニール袋をクラゲと間違えて食べてしまうことがあります。また、小さくなったプラスチックは魚や鳥にも取り込まれてしまい、命に関わる問題になります。さらに、博物館では小笠原の生き物について学びました。小笠原にはここにしかない固有種が多く存在し、とても貴重な自然が残されていることを知りました。このような生き物たちは環境の変化に弱いため、ゴミ問題の影響を受けやすいと考えられます。今回の体験を通して、ゴミを減らすことの大切さを実感しました。自分たちが出すゴミが遠くの海に流れ、生き物に影響を与えてしまうこともあると知り、日常生活でも気をつけていきたいと思いました。



カメのお腹の中のゴミ



小笠原のウミガメ

2 環境リーダー宣言 「この体験を生かして、私たちにできること」

小笠原での体験を通して、環境を守ること是一部の人だけでなく、私たち一人ひとりに関わる問題だと感じました。特に、海のゴミが生き物に大きな影響を与えている現状を知り、自分にもできることがあると強く思いました。私は環境リーダーとして、まず身近なことから行動していきたいです。例えば、ゴミの分別をしっかりと行うことや、プラスチックの使用を減らすことです。また、自分が学んだことを周りの人にも伝えていくことも大切だと思います。

小笠原で見たウミガメや自然を守るために、これからは自分の行動に責任をもち、周囲にも良い影響を与えられるような存在になりたいです。そして、みんなで協力して環境を守っていく意識を広げていきたいです。

3 参考文献、資料

・小笠原村公式サイト <https://www.vill.ogasawara.tokyo.jp>

小笠原の美しい自然を残していくために

■杉並区立阿佐ヶ谷中学校 第2学年 毛利 咲 茉

1 「小笠原でのごみ問題と生物との関わり」

(1) 個人テーマ設定の理由

小笠原でのごみ処理の実態について考える中で、島という環境がごみ問題に大きく関係していると考えた。そのため、ごみの処理方法だけでなく、小笠原ならではの特徴にも注目したいと思った。また、本土とは違う地理的条件や生活の違いがごみ問題にどのように影響しているかを知りたいと思い、このテーマにした。

(2) 事前学習で学んだこと

小笠原諸島は本土から南へ約1,000km離れており、船で24時間かかるところにある。大陸と一度も地続きになったことがない海洋島なので、小笠原の在来種の94%が固有種である。自然が豊かで固有種も多いことから2011年に世界自然遺産に登録され、観光客が多く訪れていることが分かった。

(3) 現地での体験を通して学んだこと

① 小笠原の海岸の実態

実際にビーチクリーンをしてみると、一見きれいに見える海岸でもよく見ると地面に多くの漂着ごみが流れ着いていた。ペットボトルや漁具など様々な種類のごみがあったが、特にマイクロプラスチックが多かった。マイクロプラスチックは大きさが5mm以下のごみであり、砂に混ざったりして拾うのに非常に困難だった。海岸をきれいにするには多くの人の協力が必要だと感じた。

② 漂着ごみや家庭ごみの処理方法

家庭ごみのうち燃えるごみは小笠原諸島で処理をし、埋め立て処分場に埋め立てられている。しかし、漂着ごみは塩分を含んでいるため焼却施設の故障につながり、処分することができない。漂着ごみや燃えるごみ以外のごみは「共勝丸」という貨物船で本土へ運び、処分している。ボランティア活動などを通して漂着ごみの回収をしているが、続々と海岸に流れ着くため簡単には無くならないことを知った。



海岸に流れ着いたごみ

2 環境リーダー宣言 「小笠原でのごみ問題の深刻さや処理方法の難しさを伝える」

小笠原での学習を通して、島ではごみを処理するだけでも多くの時間や費用が掛かることを知った。また、ビーチクリーンでは海岸に多くの漂着ごみがあり、簡単には無くならないことを実感した。私はこれから、ごみの分別をしっかりと行う、物を大切に使う、必要のないものは買わないようにするなど、ごみを減らす行動を心がける。また、海や自然を守るためにできることを一人でも多くの人に伝え、一人ひとりが環境について考えるきっかけをつくっていききたい。

3 参考文献、資料

- ・小笠原村パンフレット 小笠原村産業観光課

小笠原諸島にしかない生物の進化

■杉並区立東田中学校 第1学年 長谷川 幸 毅

1 「小笠原諸島にしかない固有種の特徴」

(1) 個人テーマ設定の理由

私は小笠原諸島にしかない固有種の特徴について調べたいと思い、このテーマを選んだ。

小笠原諸島は本州から遠く離れていて、小笠原にしかない独自の生物がたくさん生息している。なぜ、小笠原にだけ生息しているのか興味をもった。そして、この体験を通して小笠原の自然の大切さを学びたい。さらに、現地で気になったことがあれば、その疑問を研究したい。

(2) 事前学習で学んだこと

グループでの意見交換で、より小笠原について理解を深めた。「小笠原の海のサンゴ礁と生態系の問題」や「小笠原を守るための環境保全について」などの環境問題について学ぶことができた。他には、小笠原の年間平均気温が23℃前後の温暖湿潤な「亜熱帯海洋性気候」で、暑さで有名な沖縄と平均気温が同じことを学んだ。

(3) 現地での体験を通して学んだこと

① 小笠原で問題視されている外来種について

外来種は固有種を食べてしまう存在かもしれないが、実は「アカガシラカラスバト」と固有種の「ノスリ」や外来種の「ノネコ」・「ネズミ」との深い関係があることを知った。例えば、ネズミを全て捕獲してしまうと猛禽類のノスリが、まだ数少ないアカガシラカラスバトを食べてしまい、絶滅の可能性があるノネコも同じ。ノネコをゼロにするとネズミが増えてしまい、アカガシラカラスバトの巣を荒らしてしまう。そのため、時期を見ながらノネコやネズミを少しずつ減らしつつ、アカガシラカラスバトを増やしていくことでより良い環境を作ることができることを知り、深く感動した。



アカガシラカラスバト

② 小笠原諸島にしかない固有種の進化の過程

小笠原諸島の生物は、本土から遠く離れた島（海洋島）で孤立して進化してきた。もともとは台風や海流によって運ばれてきた種や生物が祖先となって島に定着したが、他の地域の生物と交わらないため、独自の変化を遂げていった。島には天敵が少ないため、警戒心が弱くなったり、飛ぶ力が弱くなったりする鳥などの特徴があった。さらに、島の気候や食べ物に合わせて体や性質が変化し、その特徴が子孫に受け継がれることで、新しい種類へと進化していくことを学んだ。

2 環境リーダー宣言 「小笠原独自の固有種の特徴やそれを脅かす外来種の問題を周りの人に広めて固有種たちを守って行きたい」

私は、小笠原諸島の固有種について学び、その大切さを知った。これらの生物は長い時間をかけて独自に進化した貴重な存在である。しかし、外来種によって数が減り、絶滅の危機にあるものもある。私はこの問題を周りの人に伝え、自然を守る大切さを広めていきたい。そして、一人ひとりが意識して行動することで、小笠原の豊かな自然を守ることができると思う。私は環境リーダーとして、このことに積極的に取り組むことを宣言する。

3 参考文献、資料

・ Marine Loversホームページ

marinelovers.com/2025/05/13/akagasirakarasubato_seibututanbou/

ウミガメの生活と保護活動

■杉並区立松溪中学校 第2学年 岩 橋 凜 佳

1 「ウミガメの暮らしと守るための取組」

(1) 個人テーマ設定の理由

自然体験学習の個人テーマとして、ウミガメの産卵や成長の様子、そしてそれを守る取組について調べたいと考えた。ウミガメは小笠原諸島を代表する生き物であり、人間の活動や環境問題の影響を受けているからである。産卵地である小笠原村で、ウミガメの生活と保護活動を実際に学び、自然と人との関わりについて考えたい。

(2) 事前学習で学んだこと

小笠原村の海は、透明度が高くサンゴ礁や多くの魚が生息する豊かな環境に恵まれている。一方で外洋に面しているため潮の流れが速く、台風の影響も受けやすい海である。春から夏にかけてはアオウミガメやアカウミガメが砂浜に上陸して産卵し、孵化した子ガメは海へ旅立つ。こうした命を守るため、産卵地の立ち入り制限や夜間の見回り、環境学習などの取組が行われている。

(3) 現地での体験を通して学んだこと

① ホエールウォッチングでは、以前に比べて見られるクジラの数が減ってきているという話を聞いた。実際に海に出て探しても、すぐに見つかるわけではなく、「昔はもっと見られた」という説明を聞いたときに、その変化を現実のこととして感じた。また、ウミガメの産卵場所も年々減少していると知った。砂浜の環境の変化や人の影響などが関係しているとされており、ただ自然に任せておけばよい問題ではないことが分かった。現地で実際に話を聞いたことで、「このままでは当たり前に見られていたものが、いつか見られなくなるかもしれない」という危機感をもつようになった。



ビーチクリーンで拾ったもの

② ビーチクリーンでは、一見するときれいに見える浜でも、実際には多くのごみが落ちていることに気づいた。特に目立ったのは細かいプラスチックごみで、よく見ないと気づかないような小さな破片が砂の中や波打ち際に多くあった。また、日本のものではない容器やパッケージが多く流れ着いていたことも印象に残っている。文字が外国語で書かれているものもあり、小笠原の海が日本だけでなく世界とつながっていることを実感した。さらに、砂の中にはマイクロプラスチックが多く含まれており、見た目では分かりにくい形で環境に影響が出ている現状を知った。実際に自分の手で拾ったことで、海のごみの問題をより現実的なものとして考えるようになった。

2 環境リーダー宣言 「海洋プラスチック削減のために、すぐにできることを行う」

私は、ウミガメや海の生き物を守るためには、海洋プラスチックを減らすことが大切だと考える。小笠原での体験を通して、きれいに見える海でも多くのプラスチックごみがあることを知った。だからこそ、まずはペットボトルや使い捨てプラスチックを減らし、マイバッグやマイボトルを使うことを心がけたい。また、ごみ拾いにも積極的に参加し、見つけたごみはそのままにしないようにする。こうした小さな行動の積み重ねが、ウミガメや海の生き物を守ることに繋がると考える。さらに、これらの行動を自分だけで終わらせず、家族や友達など身近な人にも伝えていきたい。学習発表会では、自分の体験をもとに、海の現状や自分たちにできることを分かりやすく話したいと思う。少しでも多くの人に関心をもってもらい、できることから行動してもらえたらいいと思う。

3 参考文献、資料

・小笠原村観光局ホームページ <https://www.visitogasawara.com/archive/archive-3984/>

世界自然遺産小笠原を守るために

■杉並区立天沼中学校 第2学年 川 田 蒼 斗

1 「世界自然遺産小笠原を守るために」

(1) 個人テーマ設定の理由

小笠原諸島には、独自の生態系が発達している。しかし、外来種による生態系の変化、観光業との両立など様々な課題が生じる。生態系を守るために現在どのような取組を行っているのか、今後どうしていけばいいのか、特に観光業との関わりについて知りたい。また、自然に対して考えることは小笠原だけでなく、世界の自然を守ることにもつながると考えた。

(2) 事前学習で学んだこと

小笠原は自然が豊かで観光資源として重要であることを学んだ。しかし、観光客の増加は固有種や生態系に影響を与える可能性があるため、自然保護と観光の両立が課題であることも理解した。島では種などの小さいものまで守るように環境への配慮が行われていると分かった。

(3) 現地での体験を通して学んだこと

① 世界自然遺産としての小笠原について

小笠原諸島は、ユネスコにより2011年に世界自然遺産に登録された。大陸と一度も陸続きになったことがない海洋島であるため、生物が独自に進化し、多くの固有種が生息している点が高く評価された。また、陸上だけでなくサンゴ礁(写真1)や海洋生態系も豊かで、進化や生態系の研究に重要な地域である。現在では外来種の侵入や観光の影響が課題となっており、駆除や入島制限などの保護対策が進められている。



【写真1】サンゴ礁

② 小笠原独自のルール(写真2)について

小笠原では自主ルールを定めており、自然を守るために特定の地域で指定された通路を守らなければならないというルールや、一部の島では上陸に関しての細かいルールがある。また、ペットの持ち込みや飼育には独自のルールがあり、村に申請しなければならない。他にも、小笠原カントリーコード、ごみに関する問題や植物や動物の持ち出しなど様々なルールがあり、小笠原が世界自然遺産であるためには欠かせない。



【写真2】小笠原カントリーコード

2 環境リーダー宣言 「自然を守るために、自分たちができることから発信する」

小笠原に行ってみて、数年前より課題が解決されてよかったとの話を聞き、実際に大きな問題は確認されていないと考えた。しかし、それはたまたまではなく、小笠原が取り組んできた成果である。守ろうとすれば自然は守ることができる。そのため私は校内での発表の場や公園や学校などに掲示するポスターなどを通じて、たくさんの人に広めていきたい。

3 参考文献、資料

- ・小笠原村公式サイト <https://www.vill.ogasawara.tokyo.jp>
- ・「小笠原諸島」関連資料 環境省

アホウドリの絶滅と保護

■杉並区立中瀬中学校 第2学年 杉 本 え み

1 「アホウドリの絶滅と保護」

(1) 個人テーマ設定の理由

鳥が好きなので、パスファインダーの本にあったアホウドリに興味をもった。アホウドリの英名はゴルフ用語でとても希少という意味の「アルバトロス」である。アルバトロスは1949年に一度絶滅を宣言されたが、1951年に再発見された。現在では小笠原諸島の鷺島(むこじま)で保護されている個体もいるそうだ。私はアルバトロスがなぜ一度絶滅を宣言されたのか、そして現在の保護活動について調べたいと思い、このテーマを選んだ。

(2) 事前学習で学んだこと

事前学習会では小笠原の生物が特殊な進化をしたことを学んだ。大陸と地続きになったことがないため生物の種類自体が少なく、閉鎖的で外敵もいない環境で進化した。そのため、トゲや毒などから身を守る能力が身に付かず、外敵や環境の変化に弱く、保護が必要と知った。

(3) 現地での体験を通して学んだこと

① アホウドリの絶滅

明治時代中期頃のヨーロッパでは、冠に鳥の羽を付ける文化があった。その羽は大きければ大きいほど価値が高かったそうだ。アホウドリは翼を広げると体長約2mにもなる巨大な鳥である。その羽はとても大きい。さらに、外敵のいない環境下で進化を遂げたため、人間が簡単に捕獲することができた。そのため、乱獲され個体数が激減し、絶滅を宣言された。その後、鳥島にて10羽の生き残りが見つかった。

② アホウドリの保護活動

鳥島には中央に平らな場所があったが、そこにいと人間に捕獲されてしまうため、生き残りのアホウドリは鳥島の急斜面の場所で繁殖をしていた。ただし、そこは砂や崖がすぐに流れてしまうため、いつアホウドリが絶滅してもおかしくないような場所だった。そのため、アホウドリの集団行動の習性を生かし、中央にデコイ(模型)を置くことにより中央におびき寄せる「デコイ作戦」を行った。それが成功し、人工繁殖を5年程続け、69羽ほどの雛が巣立っていった。ただし、鳥島は火山島でいつ噴火するか分からなかったため、雛を鷺島へ連れていき、人工繁殖を行うようになった。アホウドリが海洋プラスチックを餌と間違えて誤飲したり、帰巢本能により、鷺島ではなく鳥島へ行ってしまうたり様々な課題があったが、今では8,600羽以上まで回復した。ただし、アホウドリは成長が遅く、卵を産む数も少ないため、もともとの個体数100万羽までに完全復活するのは、うまくいっても1,000年ほどかかるそうだ。山階鳥類研究所では、人工繁殖のための資金の募金活動も行っている。



実際に作戦で使われたデコイ

2 環境リーダー宣言 「生き物にも思いやりを」

アホウドリの事例のように、人間の都合で他の生き物を巻き込むことに強い憤りを感じた。人間が人間に思いやりをもって接するように、動物の都合にも目を向けて思いやりをもつべきだと思う。私は多くの人にこの思いやりの大切さを伝え、アホウドリのように人間によって絶滅に追い込まれてしまう動物をなくし、人間と動物の共存を実現させたい。そのためにまずは私の身近な人に伝え、少しずつでもこの考えが広まるようにしたい。

3 参考文献、資料

- ・小笠原ビジターセンター
- ・山階鳥類研究所内見学会(2026年3月27日)にて

小笠原を守っていくには

■杉並区立井荻中学校 第3学年 梶 本 萌 衣

1 「海洋プラスチックが小笠原諸島に与える影響」

(1) 個人テーマ設定の理由

私は海洋プラスチックごみ問題に関心を持ち、このテーマを選んだ。ニュースや調査で、魚やウミガメなどの体内からプラスチックが見つかり、生態系に深刻な影響を与えていることを知った。海の豊かな環境を守るために、原因や現状を知り、自分にできることを考えたい。そして、未来の海を守る行動につなげたいと考えている。身近な生活習慣も見直していきたい。

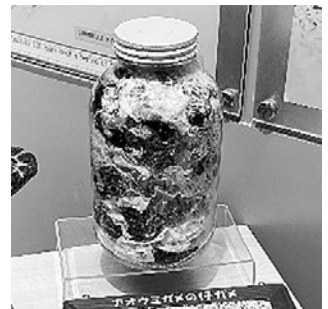
(2) 事前学習で学んだこと

島で出たごみだけでなく、遠くの地域から流れ着いた海洋プラスチックごみが多いことを学んだ。砂浜には大量のごみが溜まり、回収しても追いつかない現状がある。また、海の生き物がプラスチックを誤って食べてしまい、命に関わる影響が出ていることも知った。美しい自然を守るには、一人ひとりの意識と継続した対策が必要だと学んだ。

(3) 現地での体験を通して学んだこと

① 小笠原の海の現状と生き物への影響

小笠原の海には海流によって遠くの地域から流れ着いた漂流ごみが多く存在する。この海洋ごみは景観を悪くするだけでなく、海の生き物にも大きな影響を与えている。例えば、小笠原周辺に生息するウミガメは、クラゲなどの餌と間違えてプラスチックごみを食べてしまうことがある。その結果、体内にごみが溜まって消化できずに弱ってしまったり、死んでしまったりすることもある。実際の研究でも小笠原周辺で調べたウミガメ10匹のうち、7匹の体内からプラスチックが見つかり、海洋ごみが生き物に影響を与えていることが分かっている。



【写真1】ウミガメの体内から発見されたごみ

② 海ごみ問題と地域の取組

海岸ごみは、人が行きやすい場所では清掃されて比較的きれいだが、船でしか行けない場所ではごみが多く残ってしまうという課題がある。また海に流され、直径5mm以下になったマイクロプラスチックが多くあり、小さいためあまり回収できず残るといった課題もある。地域では海ごみの調査や回収、清掃活動などの取組が行われているとともに、学校教育の中でも環境について学ぶことで、環境を守る意識を高めている。



【写真2】マイクロプラスチック

2 環境リーダー宣言 「小笠原の現状やごみ問題について、様々な場面で発信する機会をつくるとともに、楽しみながら解決する方法やイベントを企画する」

海ごみは海岸にあるものや、海に浮いているごみだけでなく、沈んでいるごみも多く、さらに海外から流れ着くものもあるため、世界全体に関わる問題である。だからこそ、まずはこの状況を多くの人知ってもらうことが大切だと考える。私は学校の授業や放課後の時間を使い、小笠原の現状や問題について伝える機会をつくりたい。また、小笠原で行ったビーチクリーンのように楽しみながら問題解決ができる活動を行う動画を作ってSNSに発信するなど、この問題を知る人を少しでも増やしていきたい。知る人が増えていけば、今の現状が変わっていくはずである。

3 参考文献、資料

・海ごみゼロウィーク(環境省)

https://kanto.env.go.jp/blog/2019/06/post-688.html?utm_source=chatgpt.com

私たちがすべきこと

■杉並区立神明中学校 第1学年 櫛原大和

1 「小笠原諸島に生息する外来種とその影響」

(1) 個人テーマ設定の理由

外来種の台湾リスが横浜で繁殖しているニュースを見た。そこで小笠原の自然にも外来種は生息しているのか、その外来種は小笠原の生態系にどのような影響を与えているのか、またその対策はどのようにしているのか疑問をもった。このテーマを研究することで、自然や生物たちに何ができるか考えたい。

(2) 事前学習で学んだこと

私は事前学習で小笠原村のいろいろな特色を学んだ。例えば、食事で亀を食べることだ。私は人生で一度も亀を食べたことがないため食べてみたいと思った。他にも、世界遺産を守るために様々な対策をしていることを学んだ。特に驚いたのは、小笠原村の生物は固有種率が94%であることだ。小笠原に行き、たくさんの固有種を見てみたいと思う。

(3) 現地での体験を通して学んだこと

① 外来種と固有種

小笠原では固有種を保護するため小笠原の広い地域が自然保護地区となっている。自然保護地区に入ると周りには一面の柵が設置されていて、ノネコなどの外来種が入らないように対策をしていた。また、外来種除去装置があり、ローラーやマット、木酢スプレーといった外来種を自然保護地区に入れないような対策もしていた。



外来種除去装置

② 外来種による固有種への影響

固有種の豊富な小笠原に対して外来種はたくさんの影響を与えている。特に大きな影響となっているのが、外来種に固有種が食べられてしまうことである。ノヤギやノネコ、グリーンアノールといった外来種は生きるために小笠原に生息する固有種を食べてしまう。これは弱肉強食と同様である。また、外来種は昔、小笠原において人の手で飼育されていて繁殖してしまった。しかし、これ以上増やしてはいけない。だからこそ、外来種を駆除する活動をしている。また、ノネコなどは船で本島に連れていきペットにするという活動も行っている。

2 環境リーダー宣言 「ごみを減らすことによって、すべての生物のいのちを守る」

この宣言をする理由はビーチクリーンが関係している。ビーチクリーンをした際、マイクロプラスチックの多さを改めて実感した。生物がマイクロプラスチックを食べて死んでしまうケースがあり、また、そのお腹の中にマイクロプラスチックが入っている生物を私たち人間が食べてしまうこともあり、人間にも害を与えてしまう。ごみを減らすことはすべての生物のいのちを守ることにもつながる。



ビーチクリーンで拾ったごみ

3 参考文献、資料

- ・小笠原村観光局 講演資料

小笠原の生き物を守るために

■杉並区立宮前中学校 第2学年 川 口 絢 子

1 「小笠原の生き物を守るために」

(1) 個人テーマ設定の理由

選んだ理由は二つある。一つは、固有種の多い小笠原で、どのようにして固有種を守っていくのかが、現在小笠原で大きな問題だと思ったためである。もう一つは、固有種が減る原因として、外来種や環境問題などがあると思うが、それらに対してどのような対応をしているのかについて、学校では詳しく学習しなかったため、この機会に現地で学んでみたいと思ったからである。

(2) 事前学習で学んだこと

小笠原諸島は2011年に固有種の割合が高いことと、生物の進化の独特さから、世界自然遺産に登録された。また、外来種の多くは人の靴の裏についた種子などから小笠原に入り込んでいる。そのため、小笠原に入る前、入った後も靴裏の除菌をすることが大切だと分かった。そして、入り込んだ外来種に対しては殺処分するだけでなく、保護して本州に返す取組もあることを知った。

(3) 現地での体験を通して学んだこと

① 新たな外来種を入れないための取組

外来種を入れないため、南島に入る前に水での靴裏洗浄を行っている。また、固有種や絶滅危惧種に指定されている植物がたくさんいる東平サンクチュアリはノヤギやノネコを入れないためのネットの設置や、種子やプラナリア等を拡散させないために種子除去装置や木酢スプレーの設置などを行っている。



種子除去装置や木酢スプレー

② 人から生き物を守るために

小笠原では観光業の一つとして、ホエールウォッチングやドルフィンウォッチングがある。それらを行う時、海の生き物を守るために、小笠原の人々が自主的にルールを定めて守っている。例えば、クジラから300m以内は減速、100m以内は進入禁止、イルカでは一つの群れに同時にアプローチしていいのは4隻まで、水中エントリーは一つの群れにつき5回までなどである。また、最近ではドローンでクジラに近づく際、接近角度に関わらず、30m以内に近づいてはいけないなど、ドローンのルールも追加された。このように、時代に合わせて、小笠原の生き物を守るための活動が行われている。そして、このようなルールを通して、小笠原は自然との共存を目指している。

2 環境リーダー宣言 「自らエコバッグや水筒を使いプラスチックゴミの深刻さを伝えて、周りの人に自分事として考えてもらう」

私は小笠原自然体験交流を通して、観光客の意識が低いことが課題だと思った。南島などで、道になっているところを歩くように散々言われても、角の所を斜めに突っ切ったり、プラスチックの怖さを知った後に簡単にビニール袋をもらったりしていて、一時的に考えても、行動に反映されていないと感じた。その原因は結局、自分事としてはとらえていないからだと思う。そのため、難しいけれど、自分事としてとらえ、行動に移してもらう努力をしていきたい。

3 参考文献、資料

- ・「クジラ・イルカとのつきあい方 小笠原 ～自然を守りながら楽しむために～」
一般社団法人小笠原ホエールウォッチング協会

小笠原のサンゴ礁が受けている影響と自然環境に与えている影響

■杉並区立宮前中学校 第1学年 渡 部 馨

1 「小笠原のサンゴ礁と外来種が与えている影響」

(1) 個人テーマ設定の理由

小笠原諸島は世界自然遺産に登録されており、他の地域では見られない貴重な生態系が残されていると知った。特にサンゴ礁は多くの生物のすみかとなる重要な存在だが、外来種の増加や人間の活動によって影響を受けていると聞いた。実際にどのような外来種が入り込み、サンゴ礁にどのような影響をもたらしているのかを知ることによって小笠原の自然が直面している課題を理解できると考えた。また、調査を通して自然を守るために私たちにできることを考えるきっかけにしたいと思い、このテーマを選んだ。

(2) 事前学習で学んだこと

小笠原について学び、自然だけではなく日々の生活や歴史とも深く結びついた島だと知った。小笠原は無人数島だった時代を経て、様々な国や文化の影響を受けながら独自の暮らしが築かれてきた。島では物資が限られているため、自然を無駄にせず、共存する生活が今も続いている。また、生態系は陸だけではなく海の割合も大きく、固有種の多くが森や海に広がっている。こうした環境は、人の関わり方によって簡単に崩れてしまうため、歴史や生活を理解した上で、自然を守る意識が重要だと感じた。

(3) 現地での体験を通して学んだこと

① サンゴ礁が受けている影響とその対策

現地での体験を通して、サンゴ礁は近年増加している外来種ではなく、人間の污水排出、水温の上昇などが影響を与えているということが分かった。それに対する対策について島民3人に尋ねたところ、共通していたことがあった。それはトイレの水は処理されてから海に放出され、台所の水はあまり処理されずに海に放出されるということである。そのため、汚い水を海にそのまま放出させないように、台所で使用した水をトイレに流すという対策を行っているということが分かった。

② サンゴ礁が海に与えている影響

現地の体験を通して、サンゴ礁が海の生物にとってとても重要な役割をもっていることが分かった。海の中は弱肉強食の世界であり、弱い生き物は外敵から身を守る必要がある。その中でサンゴ礁は、そうした弱い生き物たちの隠れ場所となり、安全に過ごすことができる環境を作っている。また、サンゴ礁は単なる隠れ場所だけではなく、多くの生き物にとっての新たなすみかとなり、生態系全体を支える大切な存在であると感じた。



魚のすみかになっているサンゴ礁

2 環境リーダー宣言 「サンゴ礁の重要さを発信する」

私は小笠原に行き、美しいサンゴ礁を見て、サンゴ礁は海や海の生物を守るために欠かせない存在だと考えた。サンゴ礁は多くの生き物のすみかとなり、外敵から身を守る場所として、生態系を支えている。しかし、そのサンゴ礁も海水温の上昇や人間の影響によって減少している。私は派遣団の一員として、生き物のすみかとなり海の生態系を支えているというサンゴ礁の重要性を多くの人に伝え、ごみを減らすことや海に流れ出るプラスチックを意識した生活を心がけるなど、自分にできる行動を実践しながら発信していきたい。

3 参考文献、資料

- ・小笠原村公式サイト 自然環境
https://www.vill.ogasawara.tokyo.jp/nature_index/nature_environment/
- ・小笠原ビジターセンター

小笠原独自の生態系とそれを守るための保全方法

■杉並区立高井戸中学校 第1学年 柘山 仁 美

1 「小笠原独自の生態系とそれを守るための保全方法」

(1) 個人テーマ設定の理由

小笠原では、何度かあらゆる固有種が絶滅しそうになっている中で、工夫してその固有種を小笠原に残すことができた。今、小笠原だけでなく日本各地でも、絶滅しそうな生き物は後を絶たない。生態系は日本の本州の各地域と小笠原では異なる点がたくさんあるが、小笠原の工夫を本土でも参考にして、貴重な生き物の絶滅を止めることができるかもしれないと思い、私はこのテーマを選んだ。

(2) 事前学習で学んだこと

小笠原には、「小笠原カントリーコード～自然と共生するための10カ条～」という、小笠原の環境を守るためのルールがある。小笠原では、島に上陸する際に靴の消毒を行うといった、外来種を島内に持ち込まないようにする取組がされている。固有種を守るためには、外来種を入れないようにすることが大切だということを知った。

(3) 現地での体験を通して学んだこと

① 小笠原の生態系

小笠原では外来種の持ち込みにより、生態系が危うい状況になっている。例えば、アカガシラカラスバトを例に挙げてみる。アカガシラカラスバトは今まで天然記念物であるノスリと共存して生きてきた。アカガシラカラスバトは、ここ数年、ノネコ、ネズミの捕食により数を減らした。そこでノネコを一気に減らすと、ネズミが大量に発生する。ネズミを一気に駆除すれば、ネズミを餌とするノスリが減ってしまう。そしてまた生態系が崩れる。生態系は、このようにして微妙なバランスの上に成り立っている。

② 小笠原は森林生態系保護地域を作って、ガイドの同行がないと立ち入ることができないようになっている。また、ガイドと一緒に歩いていても、決められた道ではないところは歩いてはいけないことになっている。小笠原は、島の半分以上が森林生態系保護地域に設定されているということを知った。島全体で保全活動をしていることを知った。ボランティアの方々の協力もあったことが考えられる。小笠原の自然に対する思いが伝わってきた。



森林生態系保護地域入口

2 環境リーダー宣言 「私たちが本州でできること」

この体験を通して、本州でも工夫すれば、生態系を守れると考える。現在、トウキョウサンショウウオのように本州に固有種でありながら絶滅の危機に直面している動物が存在する。これらの生き物は、外来種の影響で数を減らしている。そもそも、この外来種は人間が持ち込んだものだ。私たち知らない間に、生き物を持ち込んで生態系を脅かしているのかもしれない。だからこそ私たちも動植物に触れ合ったあとに、その生き物を持ち帰らないよう徹底し、「持ち込まない、広げない」を守っていききたい。

3 参考文献、資料

・小笠原村公式サイト <https://www.vill.ogasawara.tokyo.jp/小笠原カントリーコード/>

小笠原のクジラの生態系と保全活動について

■杉並区立向陽中学校 第1学年 吉 永 花 乃

1 「小笠原のクジラの生態系と保全活動について」

(1) 個人テーマ設定の理由

このテーマにした理由は二つある。一つは、学校でイルカについて学習したため、次は同じ鯨類のクジラに興味をもったからである。二つは、日用品でもあり、工芸品として鑑賞するために昔は余すところなく使われていたクジラが今絶滅危惧種とされていることを知り、小笠原諸島での絶滅させない取組を知りたいと思ったからである。

(2) 事前学習で学んだこと

クジラは年中小笠原で見ることが可能だが、種類が違うことを知った。寒い時期に見られるのはザトウクジラなどのヒゲクジラ類で、暖かい時期に見られるのがマッコウクジラなどのハクジラ類である。同じ島でも、季節によって見ることでできるクジラが違うことを事前学習で知った。

(3) 現地での体験を通して学んだこと

① 生態系について

小笠原でよく見ることができるクジラは、ザトウクジラ、マッコウクジラである。春の小笠原で見ることができるザトウクジラは親子でメスがオスに追われていることが多いことを知った。子供のクジラは遊びとしてブリーチング、ストライク、テールラップなどを行っている。大人のクジラがブリーチングする理由は、コミュニケーション、寄生虫を落とすため、遊びなど、様々な説があるが考えられている。なお、オガワコマッコウは分布回遊が予想されるクジラで、プラスチックがおなかにたまって亡くなったオガワコマッコウが小笠原に漂着していたことがあったそう。このことから、プラスチックがクジラの生態系が崩れていく原因となっていることを知った。

② 保全活動について

クジラを守るための小笠原独自のルールがあることを学んだ。

ルール1：300m以内は減速区域

ルール2：100m以内は進入禁止区域

このルールは小笠原ホエールウォッチング協会により定められている。クジラにとって楽園であり続けられるようにという島民の思いが込められたルールだ。

2 環境リーダー宣言 「小笠原だけでなく日本にいる固有種や在来種をこれ以上減らさないために」

私は今回小笠原諸島に行き、様々な固有種を見てきた。そして小笠原諸島で、固有種が外来種の影響で個体数が減っていていることや、保全活動を行い個体数を増やす計画を立てていることを学んだ。そこで、私は一人ひとりの行動で小笠原諸島だけではなく、日本の固有種や在来種を守りたいと思った。だが、他の人に声掛けをするのには少し勇気がいる。だから、まずは私自身が外でごみを捨てない、まだ使えるごみを減らす、草や花を引っっこ抜かない、ペットなどを飼うときは適切な飼い方をするなどしていきたい。

3 参考文献、資料

- ・小笠原ビジターセンター「小笠原の歩き方 No.4、No.52～57」
- ・一般社団法人小笠原ホエールウォッチング協会「ホエールウォッチング自主ルール」

アカガシラカラスバトの保全と今後のあり方について

■杉並区立松ノ木中学校 第1学年 洞 澤 志 功

1 「アカガシラカラスバトの保全と今後のあり方について」

(1) 個人テーマ設定の理由

今回小笠原のアカガシラバトについて調べたい理由は、主に二つある。一つは、小笠原に行ける貴重な体験の際に、僕は国の天然記念物であるアカガシラカラスバトを実際に自分の目で見たいと思ったからである。もう一つは、アカガシラカラスバトは今も絶滅に瀕しており、この自然体験事業でさらに詳しく知りたいと思ったからである。

(2) 事前学習で学んだこと

小笠原の在来種のほ乳類はコウモリしかおらず、他のほ乳類は全て外来種であると知った。しかも在来種の両生類は全くなかった。歴史的に小笠原は今まで一度も大陸と繋がっていたことがなかったため、小笠原独自の生態系になった。1830年に人間が住むようになり、島の生態系が崩れ始めた。アカガシラカラスバトは子育てなどを地上で行う習性があり、ノネコに食べられるなどの理由で、激減した。

(3) 現地での体験を通して学んだこと

① 島にいる鳥たち

小笠原に滞在中、残念ながら、僕はアカガシラカラスバトを見ることができなかった。しかし、小笠原固有の鳥であるオガサワラノスリ、ハシナガウグイスやオガサワラヒヨドリを見ることができた。その他、外来種のメジロも見かけて驚いた。小笠原付近の船上からは、本土では珍しいカツオドリとアナドリが飛んでいる姿を見ることができた。



アカガシラカラスバトの標本

② 外来種とその対策について

小笠原の固有種であるアカガシラカラスバトの保護区をサンクチュアリという。この保護区の周りには柵が設置されており、ノネコやノヤギの侵入対策をしていた。サンクチュアリに入る前には、必ず木酢液を靴の裏にかけ、ローラー（粘着ロールクリーナー）で体全体をきれいにすることがあった。近年、外来種のグリーンアノールというトカゲが小笠原固有の昆虫を激減させている。グリーンアノールは小さく、見つけにくいいため、駆除が非常に難しい。

2 環境リーダー宣言 「人によって持ち込まれた外来種が固有種を脅かしていることを発信する」

小笠原では人が持ち込んだ外来種によって固有種が脅かされている。100年以上前には、島の開拓による環境破壊や外来種により、オガサワラカラスバトが絶滅した。この失敗を教訓に対策したことで、アカガシラカラスバトは絶滅には至ってない。今後、小笠原で学んだことを学習発表で共有したり情報を発信し続け、たくさんの人と意見交換して学びを深めたい。

3 参考文献、資料

- ・深い森のアカガシラカラスバトと希少植物 小笠原世界遺産センター
- ・小笠原村パンフレット 小笠原村産業観光課

小笠原の海鳥の保全

■杉並区立大宮中学校 第1学年 渡 邊 恭 右

1 「海鳥の保全・外来種対策」

(1) 個人テーマ設定の理由

海鳥は陸上で繁殖し、海洋で生活するという特徴から、絶滅危惧に指定されやすい。また、小笠原諸島では外来生物の駆除後に海鳥の繁殖成功率が回復した事例があると知り、それは世界的に見ても貴重な成功例である。どのようにしてそれを可能にしたのか、具体的な方法や工夫を現地に行き調べたいと思ったからである。

(2) 事前学習で学んだこと

小笠原諸島は30ほどの島からなっており、東京都からは南に約1,000kmに位置している。生息している生物の94%が固有種であり、世界遺産にも登録されている。その固有種を守るための取組として、外来種対策などを厳重にしている。また、環境の保護のため飛行場もなく、船で24時間の船旅を経て小笠原に到着する。

(3) 現地での体験を通して学んだこと

① 海鳥が受けている影響・詳しい現状

現在、10種ほどの海鳥が小笠原諸島で生息・繁殖活動を行っている。しかしながら、これまでに多くの海鳥が絶滅の危機に瀕してきたことを現地での体験を通して再確認した。その原因となっているのがノヤギ、ノネコやネズミなどの動物、そして環境的な要因であった。例として、かつて、母島では海鳥2種が繁殖活動を行っていたそうだが、ノネコが巣へ侵入し、卵を食べてしまい、劇的に個体数が減った事例もある。それは、他の島々でも起こり、この問題に対して、数々の対策を行った。

② 現在進行形でなお進むその対策

2000年代前半から進む海鳥の保全対策について、ビジターセンターで詳しく知ることができた。母島南崎では、ノネコの被害を受け海鳥の個体数が激減した。その対策として行われたのが、ネコ侵入防止フェンスだった。母島の住民と協力し、長い距離だったがフェンスを張りきった。その対策もあり、年々個体数は増加をしていった。父島東島は、1,000組ものアナドリが繁殖する重要な拠点だったが、クマネズミの侵入により個体数が激減していき、絶滅危険状態にまでなった。これを受けて、2008年8月からクマネズミ対策が始まり、無事個体数も回復した。このように、小笠原では2000年代初期からの20年もの努力があり、現在進行形で今もなお対策が進められている。

2 環境リーダー宣言 「小さな努力を」

私は小笠原に行き、現地の人の環境への取組を目の当たりにした。本土の人にもぜひ実践してほしいと思い、まずは小さなことから考えた。例えば、毎日カバンにエコバッグを忍ばせておいたりするだけで、ごみの削減につながる。そのような小さな努力を怠ることで、海が汚れ、海鳥や海洋生物など多くの生き物に影響する。私は、これから様々な人に環境への取組を呼び掛けていきたい。

3 参考文献、資料

- ・小笠原自然文化研究所(ioB) <http://www.ogasawara.or.jp/ibohome/>
- ・小笠原村公式サイト <https://www.vill.ogasawara.tokyo.jp>
- ・小笠原ビジターセンター

外来種対策と生態系保全の取組

■杉並区立和田中学校 第2学年 久保田 凌 介

1 「外来種問題と生態系保全の取組」

(1) 個人テーマ設定の理由

小笠原では人や物の移動が増え、外来種が侵入しやすい状況になっていると知り、その影響をより深く知りたいと思った。外来種が増えることで島の生態系にどんな変化が起きるのか関心をもった。また、靴の土を落とし、外来植物を除去する以外にどんな対策が行われ、その効果がどのようなものなのかを知りたいと思った。

(2) 事前学習で学んだこと

環境リーダーとしてとても大切なのは自然や文化に対して理解をもち、それを分かりやすく伝えるための「力」が必要だと思う。そして、世界遺産にも登録されている小笠原諸島は外来種対策など観光と自然保護が課題となっているため、小笠原の自然を深く理解し、環境リーダーとして多くの人に伝えることが大切だと思う。

(3) 現地での体験を通して学んだこと

① 小笠原で学んだことは、島の外来種の多くが戦前や戦時中に生活や軍事目的で人間によって持ち込まれ、当時重宝されていたということだ。現在ではその外来種が島の生態系に悪影響を及ぼしているため、これ以上外来種を持ち込まないことや、広げないためのルールを守ることが大切だと感じた。

② 小笠原では、外来種のノネコがアカガシラカラスバトなどの希少な在来種を捕食し、生態系に深刻な影響を与えていると知った。島ではノネコを捕獲し、島外で保護猫として新しい飼い主につなぐ取組が進められている。また、外来植物のアカギの伐採や、希少生物を守る保護策の設置など、多方面で保護活動が今も行われていると知った。これらの努力を知り、自然を守るには継続的な行動と人々の協力が欠かせないと感じた。



ネイチャーガイドの方の案内の様子

2 環境リーダー宣言 「小笠原の自然を守り、外来種を増やさない未来を作るために」

小笠原の外来種の多くは人の手で持ち込まれたものである。それが現在では時代が変わり、使われなくなって放置されたものが多く、その動植物が野生化し、固有種の住処や食べ物を奪う存在となってしまう。こうして固有種が脅かされ、生態系のバランスが大きく変わってしまっている。さらに、長い年月の間に外来種が生態系に組み込まれてしまっているため、単になくすだけでなく、慎重な対策が求められるようになってしまった。そうしたことから、これ以上新たな外来種を持ち込まないよう、学校や地域の行事などで広めていく。

3 参考文献、資料

- ・小笠原世界遺産センターホームページ <https://ogasawara-info.jp/>
- ・OGASAWARA 小笠原諸島世界自然遺産パンフレット 環境省

小笠原の固有種を守るために必要なこと

■杉並区立西宮中学校 第1学年 伊藤 茉里

1 「固有種から学ぶ生き物の多様性」

(1) 個人テーマ設定の理由

固有種を選んだ理由は、島が海に囲まれている特別な環境であることから、そこでしか見られない生物がたくさんいると考えたからである。固有種を調べることで小笠原の自然の大切さや、守るべき理由がよく分かると考えた。

(2) 事前学習で学んだこと

小笠原諸島には、日本でここにしかない動植物がたくさんいること、自然を守るために外から生き物を持ち込まないようにするルールがあることを知った。島の人たちは自然と共に暮らしているので、私たちも自然を大切にすることを大切だと学んだ。

(3) 現地での体験を通して学んだこと

① 固有種の危機

最近の小笠原諸島にグリーンアノールという外来種が生息している。小笠原の代表的な外来種である。父島や兄島では固有のチョウやトンボなどの昆虫をほとんど食べ尽くし、絶滅の危機にさらしている。さらにグリーンアノールだけでなく、ノネコやドブネズミ、植物などによる被害も少なくない。今でも島に繁殖しないように駆除の活動も行われているが、グリーンアノールは固有種よりも足が速く、捕獲にも困難だと言われている。



グリーンアノール

② 固有種を守るために私たちにできること

固有種を守るためには、私たち一人ひとりが自然に対して何ができるか考えることが大事である。まず、外来種をむやみに侵入させないことである。固有種が多く生息する島では、島内に足を踏み入れる前に必ず靴の裏の汚れを取るようになっている。少しでも外来種を持ち込んでしまうと、さらに繁殖してしまう。このような小笠原の徹底的なルールを守ることで、固有種への被害を減らすことができる。

2 環境リーダー宣言 「固有種が大切な存在であることを知るために」

私は小笠原の自然に生きる固有種がとても大切な存在であることを理解し、その一つひとつの命を守るために行動することをここに宣言する。小笠原には、世界中のどこにもいない生き物や植物がたくさん生息している。タコの木やアカガシラカラスバト、オガサワラオオコウモリなど長い時間をかけて進化してきた特別な固有種、これらは小笠原の自然を支える大切な存在だと知ることができた。

3 参考文献、資料

- ・小笠原村パンフレット 小笠原村産業観光課
- ・小笠原ビジターセンター
- ・小笠原世界遺産センター

人々の知恵で海や固有種を守る仕組み

■杉並区立西宮中学校 第2学年 高 林 和 志

1 「人々の知恵で海や固有種を守る仕組み」

(1) 個人テーマ設定の理由

以前テレビで紹介されていた、とある島のガンガゼというウニの食害対策の話をきっかけに、「人々の知恵で海を守る仕組み」について強い関心をもった。また、固有種の守り方、深刻な海洋プラスチック問題に対し、世界遺産の小笠原では、どのような具体的対策や独自の工夫が講じられているのか、その取組を学びたいと考え、このテーマを選定した。

(2) 事前学習で学んだこと

事前学習を通して、小笠原の歴史や独自の生態系といった全体像を学んだ。特に印象的だったのは、固有種を守るための厳格なルールが、島の人々の日常生活や観光と密接に関わっている点だ。自然を保護するだけでなく、それを生活の一部として、どのように維持し、共生しているのか、その「人々の知恵」の実態を現地での調査を通じて深く探求したい。

(3) 現地での体験を通して学んだこと

小笠原での体験の中で特に印象に残ったのは、観光と自然保護がしっかり両立していることだった。ホエールウォッチングでは、イルカやクジラに100m以上近づいてはいけないというルールがあり、船長は無線で他の船と連携しながら距離を保っていた。クジラにストレスを与えないように細かく調整している姿を見て、自然を守るための仕組みが現場で本当に守られていることを知った。また、クジラは出産や子育てのために小笠原の海に来ており、クジラのほうから近づいてくるのは問題ないと聞いた。実際にイルカが船のすぐ近くまで来て真下を通っていく場面もあり、この海がイルカやクジラにとって安全で安心できる場所だと感じているからこそ近づいてくれるのだと分かった。こうした体験を通して、人々の知恵と工夫によって自然が守られ、その結果として観光も成り立っていることを実感した。



船の下にいるイルカ

2 環境リーダー宣言 「当たり前のことを当たり前にする」

私は小笠原でビーチクリーンをしているときに、日本に流れ着くごみの多くが日本から出ていったものであることに気付いた。多くの日本人は「海外からのごみが多い」と言う。しかし実際には、日本から海に流れ出してしまうごみも想像以上に多く、他の島や大陸に届いてしまっているという現実がある。このことを知り、日本人自身が気付けていないほど深刻な問題だと感じた。また、現地で活動している人たちから、海洋ごみは一度流れ出すと回収が難しく、長い時間自然に残り続けてしまうことも学んだ。だからこそ、日常の中でごみを減らす工夫をすることが大切だと感じた。小笠原での体験を通して、自然を守るためには小笠原で学んだことをどれだけ他者に発信できるかが一番のカギだと強く思った。率先してみんなを引っ張っていきたい。

3 参考文献、資料

・西遊旅行ホームページ

<https://www.saiyu.co.jp/blog/wildlife/?tag=小笠原ホエールウォッチング>

小笠原は、どのようにして様々な場所で課題となっているごみ問題を改善しているのか

■杉並区立高円寺学園中学部 第2学年 飯岡 龍斗

1 「小笠原は、どのようにして様々な場所で課題となっているごみ問題を改善しているのか」

(1) 個人テーマ設定の理由

他の県や海外の海はごみ問題が大きな問題になっていることに対し、小笠原諸島の海はとても清潔に保たれている。ごみ問題改善のためにどのようなことを行っているのかを知りたいと思った。また、小笠原は他の県と比べ自然保護がとても丁寧に行われているため、その一環として、どのようにごみ問題を改善しているのかが気になり、このテーマにした。

(2) 事前学習で学んだこと

小笠原はとにかく貴重な自然があり、94%が固有種であること、また、環境を守るために外来種を島の中に持ち込ませない、繁殖させないということ大切にしているということを知った。そして、小笠原には特有の文化や食べ物があり、それを島の若い人や旅行者などに知ってもらうことで小笠原の文化を広めていくなど、様々な取組を行っているということを知った。

(3) 現地での体験を通して学んだこと

① 島特有のごみ処理方法とごみ問題の改善策

小笠原では、旅行者や島民が出したごみの中で燃えないごみはトン袋という袋(写真1)に入れて、おがさわら丸と共勝丸(写真2)を使って本州に運ぶ。また、燃えるごみは、父島にあるグリーンセンターという場所で焼却している。そして、ごみ問題の改善策としてはごみ箱が多いというわけではなく、ポスターや看板の多数設置やガイドの方の呼びかけによって対策されている。また、人が多い海岸では島民の方が自主的にごみを拾うことで落ちているごみが比較的少ないが、船でしか行くことができないような人が少ない海岸はごみが多くたまるため、定期的にごみ拾い活動を実施している。



【写真1】トン袋



【写真2】共勝丸

② 他県との比較

他県でも、海外や国内のごみが流れ着いてきて海岸にごみがたまっているが、小笠原では他県と比べても人口が少ないにもかかわらず、島民の自主的な行動やポスターの多数配置、ガイドの方の呼びかけなどの工夫や島民の協力によって美しい自然や固有種たちが守られていた。

2 環境リーダー宣言 「今の環境を守るために自分たちが自主的に行動すべきことを発表し、少しでも多くの人に考えてもらう」

小笠原では他県と比べて島民の方がごみを拾ったり、ボランティア活動に積極的に参加したりすることが多く、島民の方の自主的な行動によって、美しい自然が守られている。そのため、僕たちにも今の環境を守るために身近に落ちているペットボトルや缶を拾ったり、ボランティアに参加したりなど自主的に行動できることがあると考えたからである。

3 参考文献、資料

- ・小笠原村施設ガイド

<https://www.vill.ogasawara.tokyo.jp/wp-content/uploads/sites/2/2014/11/shisetsu.pdf>

- ・共勝丸ホームページ <https://kyoshomaru.sakura.ne.jp/>

ゴミが生物に及ぼす影響

■杉並区立高円寺学園中学部 第1学年 山 森 悠 里

1 「ゴミが生物に及ぼす影響」

(1) 個人テーマ設定の理由

ニュースで私たち人間がゴミを捨てることにより、生物たちに大きな被害が及んでいることを知り、具体的にどのような影響をもたらすのか、自分の目で確かめてみたいと思った。

また、現在小笠原がどのような問題に直面しているのか、そして、今回の派遣を通して私個人としてできることはもちろんのこと、周囲の人にもできることは何かを見つけて伝えたいと思い、このテーマにした。

(2) 事前学習で学んだこと

小笠原諸島には多様な歴史や文化があり、様々な国の人々が上陸し生活してきたため、本土とは異なった食文化や踊りなどが現在も残っており、小笠原の特色となっている。小笠原固有の生物が、ゴミなどによって影響があり、そのゴミからどう固有種を守るか、またどのような解決方法があるかを調べる必要性をグループ学習によって知った。

(3) 現地での体験を通して学んだこと

- ① 現地の海には、海外や国内の洗剤、発泡スチロール、歯ブラシなどの日用品などが漂流して小笠原まで流れ着いていた。そのゴミを、アオウミガメなどの生物がえさとして間違えて食べてしまうと、健康に重大な影響を及ぼしてしまうことが分かった。また、ナノプラスチックとマイクロプラスチックは、生物の成長を遅らせるため処分をしなければいけないが、とても細かいため私たちが2時間かけて拾っても、ほとんど減少が見られなかった。また、地域の方々が協力して拾っても、風によってゴミが増えたりしてしまうので、簡単には処理できないことが分かった。



ウミガメの胃から出たゴミ

- ② ビーチクリーンで、マイクロプラスチック以外のゴミを袋2枚分拾った。そのゴミの処分は、島内でできないものもあるため、共勝丸という船で内地に運搬し、処分するとのことだった。また、その処分費用は、トン袋1個で、約4～5万円かかると聞いて、処分するのにも大きな負担があるということを知った。人口が増加したためゴミが増えたという理由もあることが分かった。

2 環境リーダー宣言

「ゴミ問題やその影響について、報告会や日々の会話、SNSを通じて次世代に伝え続ける」

小笠原でのビーチクリーン活動を通して、マイクロプラスチックなどが動物に多く影響を及ぼすことをこの目で実際に確認できた。この実体験を全ての人ができるわけではないので、まだ現状を知らない若い人たちに今ゴミがどのような影響を及ぼしているかをSNSなどを使って周知し、ゴミの削減に向けて行動することを続けていく。

3 参考文献、資料

- ・「海のプラスチックごみ 調べ大辞典」 保坂直紀 旬報社
- ・「クジラのおなかからプラスチック」 保坂直紀 旬報社

小笠原の固有植物について

■武蔵高等学校中学校 第3学年 藤 原 拓 人

1 「小笠原独自の生態系を知る」

(1) 個人テーマ設定の理由

2025年夏、学校が開催した宮城県鳴子地域の森づくりを学ぶプロジェクトに参加し、森を守り未来へつなげる技術、地域を発展させ、人を呼び戻す努力を体験してきた。小笠原は歴史上、本州などの他の島と一度も陸続きになったことがなく、ありのままの自然が保持されている。そんなありのまま守り抜かれてきた自然を体験し、小笠原の生態系について学びを深めたいと思った。

(2) 事前学習で学んだこと

小笠原は東京、サイパンから共に1,000km離れており、周りが全て海のため様々な方向から文化の影響を受けてきた。そして交通手段は、約1週間に1本往復している東京からの船のみのため、商売などの生活は船の周期に依存している。そんな小笠原が世界自然遺産に選ばれた理由は、主に「生息する固有種の割合の多さ」と「それらの生物の進化の工程が現在進行形で確認できる」の2つが挙げられる。

(3) 現地での体験を通して学んだこと

- ① 小笠原には「乾性低木林」と呼ばれる森が広がっていた。その特徴として、全体的に木自体が低いことや、貴重な水分を保持するために葉を分厚く小さく進化させてきたことが挙げられる。そして高さ、成長力、分布力の高い外来種は固有種から日光を奪い、成長を妨げてしまうので、小笠原の景観やそれらの固有種を守るために現在も伐採が進められている。
- ② 受粉に必要な雄しべと雌しべが1つの花にあるものを両性花と言うが、小笠原の固有植物は近年、それとは異なる「雌雄異株」の植物が増えているという。これは雄しべを持つ株と雌しべを持つ株が分かれて生えており、受粉には他の要因の介入が必要であるため、子孫を残すということにおいては一見両性花の方が便利で優れて見える。しかし、これは自家受粉の持つ「遺伝子によって子孫に悪影響が出やすい」というデメリットを減らすことができ、さらに他の株の遺伝子を混ぜることによってより強い子孫を残すことができる。これは小笠原という厳しい環境の中で生き残る生存戦略だと言える。

2 環境リーダー宣言 「自分自身で更に学びを深める」

今回の事業に参加したきっかけは、2025年の夏、学校が運営している森づくりについて学ぶプロジェクトに参加したことだった。この事業で森づくりに興味をもち、「小笠原の固有植物」をテーマに設定して体験交流事業に参加した。実際に現地に行き、固有の植物を身近に体験することで、本土での森の常識とは全く異なった生態系を学ぶことができた。これらの経験も合わせ、自身のテーマである「森づくり」を深掘りするために様々な事業に参加し、そこで自分の貴重な体験を共有したい。

3 参考文献、資料

- ・「小笠原の植物の進化を垣間見る～性表現の多様性をめぐって～」 菅原敬 (2020)
東京都立大学小笠原研究年報第43号 p.103～p.111
- ・「小笠原諸島父島の乾性低木林における41年間の個体群動態(予報)」 清水善和 (2018)
首都大学東京小笠原研究年報第41号 p.90～p.104

退化という進化

■筑波大学附属中学校 第3学年 高 橋 りっか

1 「生態系の変化」

(1) 個人テーマ設定の理由

生態系における生物の変化を「進化」や「保護」といった固定的な見方だけで捉えることに違和感をもっていた。現地での観察や学習を通して、生物の形態や個体数の変化がどのような要因で起こり、それが生態系全体にどのような影響を及ぼすのかを多角的に捉えたいと考え、本テーマを設定した。

(2) 事前学習で学んだこと

事前学習会で紹介された小笠原諸島に生息している固有種の名前には「ムニン」が付いているものが多かった。その理由は小笠原諸島が地理的に孤立していることと関係する。小笠原と名付けられるまでは巽無人島(たつみむにんじま)、つまり本州から見て南東の方角の無人島と呼ばれていた。だから、多くの固有種の名前は昔の小笠原の名称の「ムニン」が付いている。

(3) 現地での体験を通して学んだこと

① ムニンノツバキの変化

父島に生息するムニンノツバキは花卉の色はピンクがかった白色で花卉の枚数は5枚の個体(写真2)と4枚の個体(写真3)が存在する。小笠原に渡る前の姿は東南アジアに生息するノツバキ(写真1)だと推測されている。原種の花弁の色は濃い紫色で花卉の枚数は5枚である。で

は、どうして父島に渡った後に姿を変化させたのだろうか。それは小笠原という特殊な環境に理由がある。小笠原諸島は海洋島といって一度も大陸とつながったことがないため、小笠原に生息する生物は皆、海を渡って来なければならず、漂着した生物の数は少ない。つまり、ムニンノツバキにとって競争相手となる別の花の数も少ないため受粉を助ける昆虫にそこまで目立つ必要もなくなるから花卉が地味になったのだ。一見退化したように見えるが、環境に適応する進化だったのだ。固有種が出来上がる過程の分かりやすい例である。



写真1 写真2 写真3
進化の過程 →

② 生態系の構成員の変化

小笠原では、固有種であり絶滅危惧種でもあるアカガシラカラスバトとオガサワラノスリの野生個体数を増やす取組が行われている。ノスリは捕食者であり、アカガシラカラスバトは被食者である。アカガシラカラスバトは藪の中の地上に巣をつくるため、外敵の影響を受けやすい。これらの生物を脅かす外来種として、ヤギ・ネコ・ネズミがいる。ここで、ネコの駆除に着目すると、一見すると被害が減るように思われるが、実際には別の問題が生じる。ネコはネズミを捕食しているため、ネコを駆除するとネズミの個体数が一気に増加する。増えたネズミは、アカガシラカラスバトの餌である木の実を食べつくしてしまい、餌不足を引き起こす。さらに、ネズミはオガサワラノスリの餌でもあるため、餌が増えたことでノスリの個体数も急増する。その結果、捕食圧が高まり、アカガシラカラスバトがより多く捕食されてしまう。このように、外来種はすでに小笠原の生態系に深く入り込んでおり、小笠原の生態系の構成員ともいえる。やみくもに駆除を行うと、かえって保護したい生物に悪影響を及ぼす可能性がある。

2 環境リーダー宣言 「『外来種』についての学びを様々な人に多くの機会を活用して伝える」

固有種の進化の過程や外来種は元の生態系の中に入り込んでしまった例を見て、「外来種」とは時代によって変わるのではないかと考えた。実際、今小笠原の固有種とされている生物も昔、鳥が運んできた外来種だったのだ。現在、人が運んできた生物は外来種として悪者のように扱われてるが、100年後には外来種が小笠原の環境に適応して固有種化しているかもしれない。私は環境リーダーとして、外来種＝悪者と思っている人に生態系は変化していくものであると伝えていきたい。伝え方としては、杉並ユネスコ中学生クラブの生徒にユネスコ青年部の立場からこのことを発表する。

3 参考文献、資料

- ・小笠原村パンフレット 小笠原村産業観光課
- ・神代植物公園公式X <https://x.com/ParksJindai>
- ・サカタのタネ園芸通信 <https://sakata-tsushin.com/>

中学生小笠原自然体験交流事業は 『杉並区次世代育成基金』を 活用しています



『次世代育成基金』とは、次代を担う子どもたちが、自然・文化・スポーツなど様々な分野における体験・交流事業への参加を通して、視野を広げ、将来の夢に向かって健やかに成長できるように支援するための杉並区独自の仕組みです。

平成24年の創設より、寄附者の皆さまからの継続的なご支援をいただくことで、多くの子どもたちに貴重な体験を提供することができています。寄附者の思いが基金を通じて子どもに託され、その子どもたちが大人になり、さらに次の世代を育てていく。この「支援の循環」が杉並に根付き、希望に満ち溢れた未来へとつながるよう、ご支援をお願いいたします。

次世代育成基金への寄附・問合せ先

杉並区子ども家庭部 児童青少年課 青少年係

〒167-0051 杉並区荻窪1-56-3

TEL.03-3393-4760

FAX.03-3393-4714

「杉並区中学生小笠原自然体験交流」 令和7年度 派遣生徒報告書

令和8年8月発行

登録印刷物番号

08-0020

編集・発行 杉並区立済美教育センター

〒166-0013 杉並区堀ノ内2-5-26

TEL.03-6379-3521

